

研究論文

# 「神がかり」の継承と変容

大宮司 信

北翔大学教育文化学部心理カウンセリング学科

抄 録

関西にある円応教を対象とし、教祖が体験した神がかりがどのように継承され、どのように変容していったかを、「修法」という同教団の宗教儀礼を通して検討した。

キーワード：神がかり、憑依状態、円応教、深田千代子、深田長治

## I. はじめに

これまで筆者は、イムというアイヌ民族の特殊な精神状態を出発点として<sup>1)</sup>、それが意識変容と関係すること、類似する状態として精神医学でいう憑依状態があることを明らかにし、さらにその延長上で憑依状態の病理やシャーマニズム・宗教との関連について考察してきた<sup>2)3)4)</sup>。

筆者の立場からみた憑依状態をその中心のひとつとするシャーマニズムは世界各国にみられ、日本においても広く浸透している。明治期以降の新しい宗教には、神がかりによって憑依状態となり、その結果できあがったものが少なくない。すでに世界的な宗教になっている天理教や大本教はその典型的な例であろう。

特に女性の教祖が目立つ点は、女性の持つ精神的・身体的特性、たとえば意識変容が比較的おきやすいのではないかといった古典的な説とともに、日本の近・現代において女性がおかれた差別的状況や社会への激しい反発とみていくことも可能であろう。

このような視点から本論考では、兵庫県に本部を置く円応教<sup>4)</sup>という宗教を取り上げ、その成立過程と変遷、特に憑依状態との関連を考える中で、日本におけるシャーマニズム的な素地を土台とした宗教の特性の一端を考えてみたいのだが、いわゆる市井のひとりの宗教家の神がかり体験が、教団形成の中にどのように位置づけられたかという面と、教祖・母の2つの面を、教えを継承した子が、どのように受容し、また変容させていったかを中心に考えてみたい。

本宗教を取り上げた理由は、上述したような憑依状態によって成立した宗教の1つであり、しかも教祖が女性であるという日本の特徴、さらに大教団でないため、現

在においてもなおかなり教団による教義確立のためだけでない生のデータが残っていて、大きな教団のように、教祖が祭り上げられ、元々の様態がどのようであったかを調べるのが困難な可能性があるのに比べ、生き生きとした資料が得やすいためである。

## II. 円応教の概要と歴史<sup>(注)</sup>

### 1. 円応教の出発過程

円応教本部は兵庫県丹波市にある。低い山並みの間に狭い平野がひろがる丹波地方ののどかな山里の一角の小高い丘の上に、円応教本部の建物群が存在している。関西を中心に、教会数189、信者数約46万人（平成13年度版宗教年鑑による）を持つ中堅教団である。

伝統的な特定宗教に属さない「諸教」に分類されている。祭壇の作りは神棚風の巨大なものであるが、かつて初代教祖が拝した粗末な神棚を模してつくられている。本部の境内で目につくのは初代教祖の戒名を刻した石造りのモニュメントと多数の信者の位牌を納める建造物で、これらからは仏教的な色合いも感じる。礼拝対象は「まと」と呼ばれている。

円応教は1919年（大正8年）の教祖深田千代子の神がかり体験をもって実際にはじまったと考えられる。彼女の足掛け7年間の宗教者としての短い生涯の間に生まれた十人にも満たぬ弟子達が、後にもふれる千代子から引き継いだ「行（ぎょう）」という名称の信仰儀礼を中心に、小グループを作るが、千代子の一子長治がそれを継承発展させて、1948年（昭和23年）に現在の円応教を設立、以後内的外的に充実発展して今日に至っている。

## 2. 教祖深田千代子の生涯

深田千代子は1887年（明治20年）、現在の円応教本部の近くの土地で出生した。貧困に加えて父の商売の失敗、母の病弱も加わり、苦しい家庭の中で千代子は育った。

20歳の時、近くの呉服屋の番頭と内縁関係に入り長治が生まれ、ようやく幸せをつかんだと思った矢先、長治の生まれた翌月、夫は仕入れに行った旅先で毒殺されてしまう。失望のどん底へ投げ込まれた千代子は、乳飲み子の長治をかかえ再び父のもとへもどる。

しばらくして、千代子の前に田舎まわりの芝居役者河合静雄が出現する。やがて彼女は長治を父に託し、大阪へ出て河合と生活する。

河合との生活は経済的にも決して楽ではなかった。加えて、夫に内密に故郷の父と子に大金を仕送りをするために、寝る間もおしんで、千代子はならいおぼえた仕立てものに精を出す毎日であった。

1919年（大正8年）、千代子32歳の時に、後に述べるような神がかり体験をするのだが、その後千代子の生活はすっかりかわってしまう。針仕事や外出をしなくなり、衣食住のすべてにわたって心にうかんでくる思い、すなわち「うかび」によって左右されることになる。「うかび」に逆らって、自分の思いのままに行動しようとすると、ひどい痛みがからだを襲ったという。しかし、それにも増して重要と思われる変化は、他人の心が見え、それが体に表れるという能力が発現したことである。

やがて千代子の霊能をもとめて、人々がおしかけるようになり、さらにその中から何人かの弟子が出現する。千代子のこの後の生活は、「研究」と称する、自らの内に与えられたものの探求と、後に述べる「行（ぎょう）」にあけくれ、弟子や相談に来る者の誘いに応じて西へ東へと巡教の旅をすることになる。この間に周囲の迫害、夫や家族との葛藤、弟子達のいさかや離反を体験し、また日記や手紙など多数の記録をのこしている。きびしい行と旅の生活にあけくれ、千代子が持病の心臓病で死亡したのは38歳であり、その宗教者としての人生は足掛け7年、実質5年6ヶ月であった。

## 3. 初代教主深田長治の生涯

先にふれたように、初代教主深田長治は、千代子の子供である。上述のように生後間もなく祖父に預けられる。小学校時代は暴れん坊であったようであるが、正義感強く、高等小学校卒業後、教員として勤務する。この間に千代子は亡くなるが、長治は母の最後を看取っている。

教員としては、きわめて常識的で、時代の申し子のよ様な忠君愛国をテーマとした教育に携わっており、円応教の萌芽時代、すなわち千代子に従った弟子達が教祖の遺徳を偲びながら集まった集団とはあまり関係を持っていなかったようである。

しかし教祖の死後約20年以上たってから、円応教に積極的にかかわるようになり、やがて周囲に推されて教主になる。彼の指導で円応教は内的・外的に整備拡大する。多くの事業・業績を残して58歳で亡くなっている。

## Ⅲ. 深田千代子の神がかりと修法

### 1. 千代子の神がかり

1919年（大正8年）、32歳の春頃から、千代子は心に思いうかぶことがその通りになるという体験が生ずるようになる。このような自分の心の変化に不思議に思っているうちに、同年7月16日の夜、美しい月に向って合掌しているうち両手が自分の意志に反して月にのび、ふるえ出すという体験が出現、さらに顔つきがすっかりかわって神がかりの状態となった。

この時神がかった千代子の口から発せられた言葉は次のように伝わっている。「主人を膝元へ呼びましているいろと申し、そのあとで、この女生まれつきよりそなわり四十になれば神の使いしめに生まれたが（つまり、世の中の道具になる生まれであるが）余り世の中が進み七年早く行人となり、姿で働くか、霊で働くかとの申し渡し致しましたから主人は姿で働かしますと申しまして…云々」

この後4日間千代子は食事をせず、睡眠もとらず、ブツブツとひとりごとを言いつづけ、おちついたあとも、もう元の千代子にはもどらなくなってしまう。

こうした千代子の神がかりの背景には、幼少期からの貧困、最初の夫の突然の不幸、再婚した夫との苦勞、子供をすてたことへの自責、仕送りのための夜なべ仕事による身体の酷使など多くの要因をあげることができ、いわゆる心因反応性の憑依状態が考えられる。

しかし自叙伝や周辺的な文献によっても、彼女が当時普段以上に特別大きな心因をもっていたり、宗教的な行事や加持祈祷に心を奪われていたという消息はない。

神がかりとなったあとの千代子には、幻覚や妄想を思わせるような症状はないが、心に浮かぶまま、彼女のいう「浮かび」によって生活の全てが律せられ、ある時は大勢の目の前で信者をてきびしく批判したかと思うと、ときには幼児のように振る舞ったりしている。しかしそれらはいずれも状況と解離してはおらず、統合失調症のような精神病性の状態とは思われない。

## 2. 千代子のその後と修法

この後の千代子の神がかりは、「まと（あるいは『まとう』あたり）」と呼ばれる、礼拝対象の前で一人で憑依状態に入るような信仰儀礼が多くなった。神から遣わされてこの世に広める教えを考察する「研究」のほかに、こうした神がかりを千代子自身は「行（ぎょう）」と呼ぶ。

実際には祭壇に向って合掌し念ずるなかで、しばしば両手がふるえ出し、「教文（きょうもん）」という、いわば神の声に相当するような声が発せられたという。当時の弟子達は彼女の言葉の中から、自らの身にあてはまるものをひろい出し、それを「神の声」、さらには「霊能力」として信じていったのではないかと筆者は考える。これが後の「修法」につらなっていったのであろう。

また「お手あわせ」という、信徒同志が向かい合って祈祷状態に入り、そこで心に浮かんだ言葉を口に出して語り合う形がある。一部はトランスや憑依状態に陥ったようである。しかしそれらの多くは、随意的な統制のとれた、しかも一過性のものであった。以上述べた「行」や「お手あわせ」が定式化されたものが、後述する現在も教団で行われる「修法」である。

長治は母千代子の神がかりの状態をどのように見ていたであろうか。彼が母の開教時の憑依状態について語ったものは多くはない。次に記すのは、長治の半生を描いた自伝的作品、「今に生かされて」<sup>9)</sup>の中の千代子の神がかりに関する部分であるが、ごく簡単な記述である。

大正8年7月16日、長治の母、深田千代子は、大阪市南区西円手町の自宅で、突如神がかりとなる。長治の小学校尋常科5年の時であった。……（中略）8月の夏休みに行ったとき、母の気持ちがいじみた行動というか、神がかりの言葉などを聞いて、びっくりもし、さびしい思いもしたことである。隣の沢田さんや後藤さんなどの叔母様になぐさめられたものである。（文献5：91-92頁）

自伝からみえる長治は世間知を重視するきわめて常識的な、しかし円満な生き方の人物であり、基本的には母千代子の神がかりとは一線を画していたと考える。

## IV. 円応教の継承

### 1. 教団としての円応教の成立：千代子から長治へ

円応教は初代教祖深田千代子によって成立したことは間違いないのだが、実際の教団としての成立は千代子の死後20年経ってからである。この間は円応修法会と呼ば

れる千代子の10人に満たない内弟子たちが、千代子を慕って集まった会であった。円応という名前もことさら考えたものではなく、千代子の戒名から取ったものである。

これらの人々の作った会は、いわば内々の教祖を偲び、その遺徳をたたえろといった形にしかすぎなかった。しかしそのグループを中核としながら、やがて長治が教団を作り上げていく。

彼が教団としての円応教の成立に関与するようになる第一歩ともいえるエピソードは昭和12年に、彼自身がガリ版刷りで発信した、「圓應智覺大師十三回忌を迎えて一子としての所感」という文書<sup>5)</sup>であろう。ただしその内容は、千代子やその弟子たちが唱え行動した信仰の内実にふれるものではなく、経理の透明性確保をも含む対内的、そして明確な組織をめざす対外的両面をめざす、教団組織設立の方向であった。

千代子を中心とする出発当初の信仰のあり方についての長治の捉え方は冷静、さらにはやや冷淡とも思える。この点について、同教団初期の有名なエピソード<sup>6)</sup>とそれについての長治の記載<sup>5)</sup>をみておこう。

二人は千代子から手合せをうけた。一番に千代子と正二、二番に末次郎。「これ今生のお別れ」と正二が千代子にかければ、二番の末次郎は震える声でうたった。「菅笠片手に杖ついて」。千代子は正二の教文に頬を濡らしながら返し教文をうたい、末次郎の教文に胸打ち震わせて行に耐えた。正二も末次郎も、この行が千代子にとって最後になるとは夢にも思っていなかった（文献6：680-681頁）。

これは千代子の行・お手合せの生涯最後のものであり、最も有名な涙をさそう、いわば名場面である。しかし、長治の自伝で同じく記載されているこのエピソードには、次のような、あっさりした記述が付加される。こんなところにも長治の冷静な姿勢を著者はみるのである<sup>5)</sup>。

この行が、深田千代子の行の最後でした。が、二人の人はべつだん気にするようなこともなく、翌十二月一日の夜行で、長治と伴仲は、山口県へ佐々木俊蔵を迎えにまいられました。（文献5：155-156頁）

### 2. 円応教の継承（1）：修法の変容

修法はクライアントにあたる信者が、指導者にあたる教団認定の教師の前で祈祷しているうちに、教師の中に千代子の霊動が起こり、様々なお告げを語る信仰儀礼の一種である。現在行われている修法は以下に述べるようなもので、一部は千代子の神がかりの追体験、一部は千

代子における「お手合わせ」との関連が残された宗教的な所作であるが、その内容は変容し、当初の神の声を聞きそれを信者に語るというスタイルからカウンセリング的なものへとなっている。

個室のなかで、場合に寄っては家族も同席のもと行われる。クライアントにあたる信者を前にして、指導者にあたる教団認定の導師がそれぞれの儀礼的な行動を行うと、導師の中に千代子の霊動が起こり、様々なお告げを語る。

クライアントに相對している間に、導師が心にうかんでくること（「うかび」という）によってさまざまな言葉（「教文」（きょうもん）という）をひとりごとりし出す（「口がきれる」という）。信者はそれを神の声としてきく。実際にはかなり意味不明な「教文」も多い。そこであとで導師からその解説をうけるわけだが、そのやりとりの中で、信者は自分にあてはまっている部分を、神から与えられたものとしてうけとる。見方によっては一種のカウンセリングとも見られる。演者が参与させてもらった場面では、たとえ憑依状態になっても、ほとんどが随意的で統制のとれた一過性のもので、憑依状態を呈さぬもののほうが多かった。

全体として長治は千代子の神がかり体験にはじまる修法を、まずは受容し、後に次第にそれと距離を置く方向に向かったと考える。次の文章に例示されるように、長治は円応教の行や修法には批判的である。

問33. : 「一にも修法、二にも修法」このようなことはよいのでしょうか。答：ひとことにして言えば、「それはよくありません」、それは、み教えに背くからであります。…（後略）。（文献7、76頁）

一にも行、二にも行、ぎょうぎょうでよもすがらとか何とか愚句さえ拙作したいほどお手合わせ（修法）をぎょうと早合点して、ぎょうに終始してしまう現状。12月6日の行日に会長長より「ぎょうとお手合わせを混同している。お互い先生方のほんとうのぎょうさえもすたれている。大先生御存命中のあのぎょうはできていない。むしろ曲解されたようである。」との話あり。もっとも至極とうなずかれ、私も平素よりその感を同じくする。お手合わせは行の一部分である。（文献8：117-118頁）

今の私には、お手合わせ（修法）はできない。…（中略）。私はお手合わせの表現を通して、相手の心情霊性を批判しようとする。決して完全に当たっているとは思わないが、まんざら全然違っているとも思わない。いわゆる大同小異であろう。ある人はお手合わせをもって、相手に自分の平素の不平と忿懣をさらけ出しているのもある。もう一つ悪いことは、計画的に故意に御教祖様の霊導に仮託して、お手合わせをもって相手を攻

撃し苦悶に陥れる向きさえ窺われることもある。もしも、こうしたことがあったとすれば、いや、こうした事を私はままた見受けるのである。これこそ本教の賊であり、邪教であり、お手合わせを冒瀆するの甚だしいものである。神性と獣性とをそなえた人間だから、ある時には神性のひらめきが多く出る時もあるろうし、ある時は獣性の働きが露骨に、または、仮面を被って現れる時もあるだろう。私はお手合わせを決して軽んじてはいない。お手合わせは、御教祖様の創始にかかるものの、全く嚆矢であるといっても差つかえなからう。しかし本教の中心生命をなすこのお手合わせも私事に弄んではいけない。…（後略）。（文献8：157-158頁）

長治が千代子の神がかりやできあがった修法に対して批判的であった理由はいくつかの面から考えられよう。

一つは長治自身が千代子の神がかりやそれ以降の千代子の状態についてあまり親しく接しなかったこと（長治はその頃まだ成人していなかった）、また長治自身の受けた教育はそれなりに近代的なものであったろう。自身が教師であったことも個人としては受け入れられなかった可能性があろう。

いずれにしても修法という形で成立した千代子の神がかりの継承は、長治としては何らかの形で変えていかなければならないと考えたに違いない。さらに長治の側から見れば、神がかり的な宗教、すなわち修法を強調する宗教よりは、より倫理的な宗教、すなわち、陰の業を中心とする円応教の教理中心の宗教への志向もあった可能性は指摘しておいても良いと思う。

### 3. 円応教の継承（2）：「おや」から「みおや」へ

1歳の時に祖父の元に置き去りにされたことに対する、長治の母に対する恨みは、千代子の伝記や長治の自叙伝によっても、必ずしも明確ではない。のちに長治は、母千代子が万人の母となるために自分一人の母たり得なかったことを文章として述べている<sup>7)</sup>。

わたし自身から考えるときには、御教祖様の亡くなられた当時に、本当にわたしは親のために、一月も一緒におったこともないし、親の愛情というか、乳を吸うたということもないし、無論、養育もしてもらってないし、わたしはおじいさん育ちだったんです。だから、御教祖様が亡くなられたときに、悲しい思いはしたけれども、本当にこれが母としての愛情か、というようなことはあまり感じなかった。…（中略）。

ところがこの御教祖様のこの手紙を読むと、すべてのところに親と子の愛情、すなわち御教祖様の愛情というものは一歩だけの具体的に表れた、本当の親子の愛情で、そのときにこの子がかわいいからなんとかしてやりたいという、そういう情、そのときもあったと思うけれども、そういう情はなかった。

あったんだけど、自分で生活していらっしやらないし、沢山の人のお陰で生活をしていらっしやったから…（中略）。

あるいはわたしを立派な者に、わたしを中学校にやり、高等学校にやり、大学にやるという先生方があったけれども、御教祖様はそんなことはしてはいけない、長治は長治の思う通りにさしたらよい、それを聞いただけでも、わたしはそのときに、なんたる母だと思った。その人たちのお陰で大学を出たとしてごらん下さい。母はそれまでに亡くなって、そうして円応教になったら、御教祖様のおっしゃっていらっしやる通りに、その方々に対して、わたしは本当に有り難いという気持ちは起きるけれども、これが理想だから、わたしは理想通りにやろうと思ったりすることはできない。その人が「いや、それはいかん、こうせなければならん」と押さえられたら、わたしたちはその働きができない。ちゃんと御教祖様は、そういうことを、真剣に昔から考えておられたというか一つの霊示であったと思う。

そのとき一人一人のわたしに対する愛情が本当に失われたように思うけれども、本当にその愛情は、自分の苦しい生活の上に、人様にお世話になっているから、一つ一つがわたしに、着物一つも作ってやることができないとか、いろいろそういうことが書いてあることもございますけれども、人様の恩恵を受けてまでわたしが学校へ行くこともできない。それを断られた。これは立派であった。それが親の子に対する本当の愛情だ、永遠の愛情だと思う。本当に立派な親であったと思う。それは、今もこうして、皆さんが御教祖様を慕ってくださるし、沢山の教会長先生なり、皆さんが、御教祖様の御遺徳を慕ってくださる。

そのことは、御教祖様がわたしを円応教の代表者として、この世に生を受けさせて頂いている。その愛情というものが、今、及んでいる訳です。具体的な愛情はなかったけれども、心はあってもできなかった、でも永遠にわたし一族の者が皆さんのお陰で、生活させて頂ける、健康であらせて頂ける、そこに御教祖様の永遠の愛情があったのではなからうかと思うのでございます。（教典183項による深田長治の教示、昭和49年12月6日例月祭教示）

わが母（御教祖様）は、夫をすて、親をすて、子をすて、弟をすて、家をすてておのが宗教的天才の發揮につとめた。しかし、その反面、夫を思い、親を思い、子を思い、弟を思い、家を思うの情切なるものは限りなく遺文にあらわれている。（文献8：134頁）

円応教から出版され、筆者が知る限りの教祖深田千代子の伝記は2種類ある。いずれも千代子の誕生から死にいたるまでの一生をよく描いている。新しい方の伝記の著者は岡田隆であるが、前書きは第2代教主である深田充啓であり、そのタイトルは「教祖伝」<sup>6)</sup>である。一方

それより古く、初めて出された伝記は教祖の遺文集3巻の編集にも従事した田子佳代子の編集になるが、教祖の遺文（「行場日記」など）・弟子達の証言のほか、長治の日記も適宜引用されている。この伝記の前書きは長治が書いており、先述の「教祖伝」の前書きとことなり、編集の経過が詳しく記述されている。本書について長治は、「母の伝記」「深田千代子伝」などの表現をしているが、最終的に冠された伝記のタイトルは「みおやのわがあと」である<sup>9)</sup>。詳しいいきさつについてはさらなる検討が必要であろうが、筆者には「自分の母」だけでなく、「みおや」すなわち「万人の母」として千代子を位置づけることで、長治は母へ抱いていたさまざまな思いを乗り越えていったのではないかと考える。

## V. おわりに

円応教についての宗教学的的研究は多くはない<sup>10-12)</sup>。教祖のもつカリスマ的能力については先述したように、長治は憑依がらみの修法には一定の距離を置いているように見える。それはつきつめれば母であり初代教祖である千代子の開教の原体験である神がかりにも距離をおこうとする可能性にも通じる。

一方それとは対照的に、彼は母が唱えたもう一つの行、すなわち「陰の行」、「日常生活において誠実に歩むこと」を強調する。彼によって円応教は、教祖の憑依状態の追体験の重視から、「日常生活を誠実に行う」方向の重視へと転換していった。そして教祖と同じ憑依状態を体験する「行」や「お手あわせ」は、長治によって日常生活における信者の問題点を指摘するという、「陰の行」を補強する役割へと変えられていったと考える。

千代子と長治の組み合わせは、これまでしばしば指摘されるシャーマンとオーガナイザーの関係であるが、無統制な憑依に似た「お手あわせ」を、統制のとれた「修行」へとかえ、千代子を自分一人の母から万人の母へと変換させた継承者長治は、円応教を一種の健全な倫理志向団体へと脱皮させたと同時に、母との葛藤をもそれによっていやしているように思えるのである。

### 注

本章は教団出版の教祖の伝記<sup>6)</sup>ならびに筆者の調査結果<sup>4)</sup>に基づいて記載する。

### 付記

本論文の要旨は第43回日本病跡学会にて発表した。

**【文献】**

- 1) Daiguji, M.: Imu phenomena observed among the Ainu people in northern Japan: past and present, 北翔大学北方圏情報センター年報, 4号, 1-4 (2012)
- 2) Daiguji, M.: A psychiatric aspect of new religious movements, 北翔大学北方圏情報センター年報, 5号, 17-22 (2013)
- 3) 大宮司信: 日本における憑依研究の一側面—精神医学の視点から—. 北翔大学北方圏情報センター年報, 6号, 1-6 (2014)
- 4) 大宮司信: 憑依の精神病理—現代における憑依の臨床—, 星和書店, 東京 (1993)
- 5) 深田長治: 今に生かされて, 第1版, 円応社, 兵庫, (1988)
- 6) 岡本隆: 教祖伝, 第1版, 円応社, 兵庫, (1987)
- 7) 深田充啓 (編): 円応教とは, 第1版, 円応社, 兵庫, (1979)
- 8) 深田長治: 心のつちかい (2), 円応社, 兵庫, (1978)
- 9) 田子佳代子: みおやのわざあと. 第1版, 円応社, 兵庫, (1975)
- 10) 深田充啓, 島田一男: 現代宗教者に問う10; 円応教教主—深田充啓. 中央公論. 98: 254-259, 1983
- 11) 松野純孝: 円応教. (松野純孝 (編): 新宗教辞典. pp 30-35, 東京堂出版, 東京, 1984)
- 12) 磯岡哲也: 新宗教の地方への伝播・浸透・定着過程—円応教飯南教会の事例. 宗教研究 60: 51-70, 1986

**【英文抄録】**

Enno-Kyo religion in Kansai area was described as a subject and it was considered through the religion courtesy how was the divine possession of the founder experienced succeeded to and accepted.